新しい世界開く本に

日本の学校教育で教科書は学びの根幹であり、私たちが生きる社会を知る入り口でもある。新興出版社啓林館（大阪市天王寺区）は教科書を作り始めて71年。近年は子どもたちの主体性や思考力を育てることを重視している。佐藤諭史社長(49)に学びの作り手としての思いを聞いた。【聞き手・安部拓輝、写真も】

けいざい最前線

教科書作り続けて71年

新興出版社啓林館 佐藤諭史社長

――会社の生い立ちを教えてください。

◆戦後間もない1946年、日本の復興の要は教育だという志のもとで3人の創業者が自宅の一室を改装し、小学生用の国語と算数の自習書を出版しました。明治期からの国定教科書制度は廃止され、文部省（現文部科学省）の検定を受けて民間の出版社が教科書を作る制度に移行した時期です。弊社はブランドの「啓林館」をつくり、51年に小学校の理科、翌年に算数の教科書をそれぞれ発行しました。その後、中学、高校へと範囲を拡大していきます。「理数の啓林館」と呼ばれてきましたが、近年は英語にも力を入れています。

――変化の激しい時代を迎える中で、教科書にはどんな役割がありますか。

◆社会問題や自然災害に対して解決の方法を教えることはできません。しかし、答えを導く道筋の作り方は示せるかもしれない。啓林館が大切にしてきたのは、学校外の生活の中で使えるような知識と技能を育てることです。この理念は「社会に開かれた教育課程」を掲げる現在の学習指導要領が目指す方向性に通じています。

――教科書の中で具体的な事例を教えてください。

◆例えば小2の算数では「500円で98円のパンが五つ買えますか」という問題があります。98円を5回足して答える方法もありますが、500円を5枚の100円に分けてそれぞれを98円と比べれば厳密に計算しなくても結果を見通すことができます。日常生活に生かせる暗算や見積もりの方法を身につけてもらう学習です。

中学の理科では小学校で地震災害を学んだことをおさらいしながら、揺れの広がりや規模、地震が起きる仕組みへと進み、こうした現象が地球の地殻変動によって長い歴史の中で繰り返し生じていることを解説しています。地形や地質の特徴を知り、地球の営みが温泉や地熱発電などの恵みをもたらしていることも理解することで、見慣れた景色が違って見えるような学びになればと考えています。

――単元が学年を超えてつながり合っていますね。

◆子どもたちは年齢が上がるにつれて発達を遂げ、知識を蓄えていきます。同じ自然災害というテーマでも獲得した知識によって見え方は変わります。小中高と繰り返し発展的に学び、その蓄積を大切な人のために働かせる一つの知恵にしていきたい。その意味で教科書は「新しい世界を開く本」だと思って作り続けています。子どもたちを新たな世界に導き、自分や家族の命を守ったり、地域社会の問題を改善したりすることができる力を育てていければと願っています。

――学校の勉強が受験だけではなく、身の回りで生きていると実感できる機会は重要ですね。

◆2013年から月2回、地元に住む小学生を対象にした「わくわく学習教室」を始めました。地元企業と連携し、製造現場を見学しながら身近なところに理科があることを伝えています。型に流し込んだチョコレートを空気圧による振動で落としたり、ペットボトル飲料のおいしさを水溶液の濃度で考えたりしてきました。それが発展し、21年からは月2回、教科書の著者である大学の研究者がゼミ形式で講師を務め、小学生が研究する「たんきゅう塾NEO」（有料）が始まりました。

――どのような仕組みですか。

◆三つのカテゴリーに分かれています。台所や風呂場にある不思議を体験する低学年向けや、「大阪府にはネコは何匹いるのか」などインターネットでは調べられない問題にトライする小3～5向けがあります。興味を持ったことを企業と連携して研究を深める小4～6向けは現在、細菌・ウイルスをテーマとしており、23年3月に研究発表会を開く予定です。

ICT（情報通信技術）の進歩で学びの選択肢は広がっていますが、その道のプロと出会い、本物を体験することで得られるものは大きいと考えます。こうした機会を創り出すことも、我々にとって大切な役目だと思っています。

さとう・さとし　大阪府生まれ。2000年に入社後、児童図書部長などを経て18年から現職。

新興出版社啓林館

1946年創業。小中高の理数系や英語などの教科書を「啓林館」で出版し、教科書に沿った問題集は別ブランドの「新興出版社」で発行している。「文研出版」として児童書も扱っており、谷川俊太郎作の絵本「もこ　もこもこ」は150万部のミリオンセラーを達成している。2022年9月期の売上高は101億円。従業員数は220人。

聞いて一言

取材から帰宅して中学生の長男に中1理科の教科書を借りたところ、啓林館だった。構成されている各分野の末尾には学習内容とつながる身近な話題が紹介されている。「生命」は世界最大・最小の花、「地球」は過去の津波、「物質」は海水から真水を作る、などだ。例えば地層を調べて過去に津波が周期的に来ていることを知れば、次の発生を予測して減災に生かすことができる。教科書は生きていく知恵を授けてくれる本なのだと気付いた。学び直してみたくなった。